資料３

平成２５年１０月２２日

平成２５年度千葉県公立高等学校
入学者選抜方法等改善協議会
委員長　　石　井　信　代　様

平成２５年度千葉県公立高等学校
入学者選抜方法等改善協議会専門部会
主　査　　森　谷　英　一

千葉県公立高等学校入学者選抜制度のアンケート結果の分析について（報告）

このことについて，別添のとおり報告します。

平成２５年度千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会専門部会報告

１　経緯

本専門部会は，平成２５年５月２０日に，平成２５年度千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会から，千葉県公立高等学校入学者選抜のアンケートの結果について，専門的な分析を付託された。

２　委員

森谷　英一主査，増澤　保明副主査，森　秀夫委員，小川　好信委員
岩波　浩之委員，吉田　雅一委員，松村　智明委員，小安　由男委員
増子　雅代委員，根本　巖委員

３　開催日時

（１）第１回　平成２５年７月　２日（火）午後１時３０分から午後４時３０分まで
（２）第２回　平成２５年８月　７日（水）午後１時３０分から午後４時３０分まで
（３）第３回　平成２５年９月　５日（木）午前９時３０分から午後４時３０分まで
（４）第４回　平成２５年９月２０日（金）午後１時３０分から午後４時３０分まで

４　会場

（１）第１～３回　千葉県教育会館
（２）第４回　　千葉県教育庁企画管理部会議室

５　調査研究内容

アンケート結果の各項目について，分析及び検証を行い，現行の入学者選抜制度の課題やその改善策について協議した。

第１回及び第２回で，主にアンケート結果の分析を行い，第３回及び第４回では，その分析結果をもとに，現行制度の改善策を協議するとともに，仮に選抜を一本化した場合をシミュレーションすることで，更に詳細な検証を行った。

別紙のとおりその内容を報告する。

別紙

専　門　部　会　報　告　書

1　現行の選抜制度について

（1）制度のメリット

ア　受検機会が２回あると，志願できる高校の幅が広がり，生徒が自分の進学したい学校を主体的に選択することができる。
イ　高校は，前期・後期と，選抜ごとに異なる選抜・評価方法で，生徒を多面的に評価し選抜を行うことができる。
ウ　早く進路先を決定したい受検生・保護者にとって，前期選抜が，２月中旬に検査を実施し，２月下旬に合格発表をすることはよい。
エ　入学者選抜は，インフルエンザ等体調管理が難しい時期に実施されるので，受検機会が２回あることはよい。
オ　経済的な事情等で，公立高校のみを志願する中学生にとっては，受検機会が２回あることはよい。

（2）課題及び改善策等

	現状	課題等	改善策等
ア　実施の時期	・前期選抜は２月中旬に，後期選抜は２月末日又は３月始めに検査を実施している。前期の結果発表と後期の出願日との間は１日あいている。	・前期の結果の発表から，後期出願までの期間が短く，中学校での指導に余裕がない。 ・前期が不合格の生徒は，後期に気持ちを切り替えることが難しい場合もある。 ・選抜業務が長期にわたるので，授業時数の確保が難しい等，学校の教育活動に支障が出ることがある。	・前期の検査を現行より１日程度前に実施することで，前期選抜発表と後期選抜出願の間を２日間程度あける。 ・提出書類等を減らす等選抜業務が簡素化できるよう，検討する。
イ　予定人員（選抜枠）	・前期選抜の選抜枠は，普通科は募集定員の３０～６０％，専門学科は５０～８０％である。	①前期と比較し，後期の選抜枠が小さいため，後期が第２次募集のように捉えられている。 ②専門学科では，前期で内定しなかった生徒のほとんどが，後期でも同じ高校を受検している。	①前期・後期ともに選抜枠を５０％とする。 ②前期では普通科を受検し，後期では専門学科を受検する生徒もいるので，現状維持でよい。 ②専門学科の前期選抜枠を，高校によっては，１００％までとする。
ウ　検査の時間及び内容	・前期後期ともに５教科の学力検査を行い，実施時間については，各教科前期は５０分，後期は４０分で実施している。	・後期選抜は，前期選抜よりも学力検査の時間が短いので，第２次募集のように捉えられている。	・学力検査を，前期後期とも，同じ時間で実施する。

エ　期待する生徒像	・各高校が求める生徒像を示したものである。受検者の志願を制約するものではない。	・自校の特色が具体的でなく，生徒・保護者に伝わりにくい高校が多い。	・期待する生徒像を，より具体的でわかりやすいものにする。 ・期待する生徒像を廃止する。
オ　志願理由書	・志願の理由及び自己アピールについて，志願者の直筆で記入する。	①中学校では，多くの時間をかけ，指導している。 ②選抜の資料として，どのように使われているかが，よく分からない高校がある。	②高校の選抜・評価方法を更に具体的にし，志願理由書の評価方法をわかりやすくする。 ②志願理由書を廃止する。
カ　算式	・中学校の評定合計平均値にばらつきがなくなってきており，成果が出ている。 ・公平性が保たれているので，選抜の資料として適切である。	・評定合計平均値が，標準値より高い中学校の生徒・保護者にとっては，算式を使うことにより，評定の合計値が下がり，不利益と思われることがある。	・標準値（９５）について，再検討する。 ・算式の在り方について，検討する。 ・現状のままでよい。
キ　入学確約書	・入学許可候補者に内定した者は，入学確約書を在籍する中学校の校長を経由して，選抜の結果の発表の時からその翌日の正午までに，志願した高等学校の校長に提出する。指定された日時までに提出がない場合は，入学の意思がないものとして扱う。	①中学校長の職印を押印して提出期限内に高校に提出するには，期間が短い。 ②提出を不要とし，別の方法で入学の意思を確認する。	①中学校長の職印の必要性を検討する。 ②中学生や保護者が，入学確約書を提出した高校に必ず入学するという確認をするためにも存続させる。 ②入学確約書を廃止する。 ②入学確約書の内容を，他の提出書類で確認することができるようにする。
ク　選抜・評価方法	・前期選抜は２日間で実施し，第１日に５教科の学力検査，第２日に面接，作文等から１つ以上の検査を行い，学校の特色に応じ，生徒の多様な能力・適性等を多面的に評価している。 ・後期選抜は１日で実施し，５教科の学力検査の後，学校によっては，面接等を行い，県下ほぼ同一の方法で選抜している。 ・学力検査，調査書，学校が定めた検査で評価する項目及び評価の基準と，選抜の具体的な手順や総合的な判定の方法をまとめ，選抜・評価方法として，各高校はホームページ等で公表している。	・特に前期選抜において，各高校が，どのような選抜・評価方法で選抜しているかが十分に理解されていない場合がある。	・選抜・評価方法をより具体的なものにするとともに，透明性を更に高める。 ・生徒・保護者等への周知の方法について，再検討する。

ケ　その他	・前期選抜は特色ある入学者選抜の理念を引き継いだ選抜を行い，後期選抜は県下ほぼ同一の方法で選抜している。	①前期選抜・後期選抜の趣旨や違いが周知徹底されていない。 ②選抜の名称から，同じ内容の選抜が前後期に分けて二度あると捉えられている。	①あらゆる機会を捉え，周知徹底を更に図るとともに，高校では選抜・評価方法を更に具体的にする。 ②選抜の名称を変更する。

２　選抜の一本化を想定した場合について

（１）メリット

ア　選抜業務に係る期間を短くすることができ，中学校・高等学校の授業時数の確保につながる。 イ　２回の選抜に比べ，不合格を経験する生徒が減少する。

（２）メリット・課題等

	意見	メリット等	課題等
ア　実施の時期	・検査：２月中旬 発表：検査１週間後	・３月に行われる卒業式等の学校行事に余裕を持って臨める。	・２月中旬の実施では，中学校の授業時数確保につながらない。 ・中学校では，進路先の決定した生徒が卒業式までの授業に集中できないことが考えられる。
	・検査：２月下旬 発表：検査１週間後	・２月以降の授業時数を今以上に確保できる。	・進路先を早く決めたい生徒にとっては，２月下旬の検査は遅い。 ・検査日によっては，３月に行われる学校行事に影響が出る可能性がある。
イ　検査の日数	・１日 ・２日間	・検査や選抜業務に係る日数が減るので，授業時数を確保することができる。	・１日での実施は，生徒の能力を多面的に評価することは難しい。
ウ　検査の内容	①５教科の学力検査及び各学校が定める検査を実施する。 ②５教科の学力検査のみ実施する。	①学力検査及び面接，作文等から１つ以上の検査を実施し，各学校の特色に応じ，生徒の多様な能力・適性等を多面的に評価する。	②５教科の学力検査のみでは，生徒の能力を多面的に評価することが難しい。

エ　期待する生徒像	・全ての高校に必要である。 ・不要である。 ・期待する生徒像を示すかどうかを学校が選択する。	・受検生が，その高校の求める生徒像を理解した上で，志願できる。	・期待する生徒像を示さない場合，その高校が求めているものを，端的に把握することが難しくなる。
オ　志願理由書	・不要である。 ・志願者に提出を求めるかどうかを学校が選択する。	・中学校では，志願理由書をとおして，自己をみつめ，自分の進路を考えさせる指導ができる。	・中学校では，指導に多くの時間が必要である。 ・選抜の資料として，どのように使われるのか明確にする必要がある。
カ　選抜・評価方法	①現行の前期選抜と同様の選抜・評価方法で選抜する。 ②学力検査の結果と調査書のみを資料とし，選抜を行う。 ③全ての資料を点数化し，選抜を行う。 ④複数の選抜・評価方法で選抜を行う。	①複数の選抜・評価方法を用いることで，学力だけでなく，生徒を多面的に評価できる。	②後期選抜と同じ選抜・評価方法にすると，各校の特色に応じた選抜が難しくなる。 ③④複数の選抜・評価方法を導入すると，選抜が複雑になるので，資料を点数化する等具体的にし，選抜・評価方法の透明化を更に進める。
キ　その他	・１回の選抜となるので，不合格となった生徒は，第２次募集を実施する学校・学科を志願することができる。	・選抜で不合格を経験する生徒が減少する。	・中学校の進路指導が安全志向になり，中学生の主体的な進路選択が難しくなると思われる。 ・経済的な事情等で，公立高校のみを志願する生徒にとっては，進学できるかの不安が現状より増すことになる。

3　その他

ア　学区内の学校数や交通の便等，地域により差があることを考慮すべきである。
イ　中学校と高等学校のそれぞれの入試業務がどのようなものであるかをより深く理解したうえで，選抜制度を検討すべきである。
ウ　私学との意見調整が必要である。